

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(19)

中村周平

2012年3月某日、初めて訪れた同志社大学新町キャンパスの食堂で私は落ち着かない時間を過ごしていました。食堂に置かれた時計と家から印刷してきたものを交互に見返しながら…数時間後に控えた、ある面談が気になって仕方ありませんでした。

弁護士の方を通じて紹介していただいた方は、同志社大学政策学部で教員をされている川井圭司先生でした。ご専門はスポーツ法学、中でも労働法を中心に研究されています。また、同志社大学体育会ラグビー部のOBでもあり、大学のプロフィールによれば「学生時代はラグビーに明け暮れ、勉強面ではかなりの落ちこぼれであったが、その後、指導教授の薦めでスポーツ法学と出会い、その必要性を認識するとともに研究の楽しみを見出す。」(同志社大学政策学部ホームページより)とあります。大学教育という場で「文武両道」を実現された方でした。

面識といえば、以前弁護士の方に誘っていただいて参加したシンポジウムでご挨拶をさせていただいたほど。スポーツ法学会での発表の際は、大学業務のため欠席されており、面と向かってお話をさせていただくのは初めてのことでした。

メールで数回のやり取りをさせていただき、お忙しい中、面談の時間を確保していただきました。日

程が決まってから面談の日までには三週間ほどあったのですが、緊張と不安が日を迫るにつれて高まっていきました。「先生の教え子でもなければ同志社大学の学生でない自分が、論文指導をお願いする…それって物凄く身勝手なお願いでは」。これが頭に浮かんでからは、食事量も日に日に少なく…。「そういえば、ラグビーやってた頃もメンタルほんまに弱かったなあ。試合前になるとグッパが止まらず、何度もえずいていたような…」と、自分の精神面での弱さをあらためて痛感しました。

そして、あれよ、あれよという間に、面談当日を迎えました。川井先生の研究室がある新町キャンパスは自宅からバス一本で行ける距離だったのですが、極度の緊張と絶対に遅れられないという不安から、2時間近く早めに到着してしまいました。川井先生の研究室の場所を確認した後は、新町キャンパスに学生食堂があることがわかり、そこで面談までの時間を過ごすことにしました。その日までに食事量が極限まで減っていたこともあり、話の最中に血糖値が下がってしまうことは避けなければと、おそらくカレーか何か…カロリーの高そうなものを頼んだと思います。味はおそらく美味しかった(いや、美味しかったに違いない)と思うのですが、初めて訪れる大学のカレーを評価できるほど心に余裕はありませんで

した。食べ終わってからは、面談で自分が話したいことの整理の時間となりました。事故の詳細、その後のラグビー部や学校との関係の変化、3年にわたる調停、立命館での学び、知識不足のまま発信していくことの危うさ。限られた時間の中で、自分が一番伝えたいことを順番に整理していきました。

お昼過ぎ・・・とうとう約束の時間が来てしまいました。研究室がある建物は南北に伸びる縦長の造りで、川井先生の部屋は入口から一番遠い箇所に位置していました。距離にして30メートルほどの廊下、ただその日は実際の距離以上に長く感じました。部屋の前に着いて軽く深呼吸した後、ノックをしました。

川井先生は現役のラグーマンを彷彿とさせる本当にながしりとした方でした。部屋にお邪魔させていただき、簡単な自己紹介をさせていただいた後、本題に入っていました。ラグビーを始めたきっかけや中高時代のチームとの思い出、事故の経緯、その後の学校側との関係性(時間の経過の中で感じた温度差や芽生えだした不信感)、調停でのやり取り、修士論文作成によって気付くことができた過去の自分、スポーツ法学会での発表…。ラグビーやチームに対する想い、そして自分自身に足りないことを包み隠さず川井先生にお伝えしました。また、こちらが一方的に話すのではなく、川井先生が適時質問をしてくださったことで、より自分の想いを深めてお話しすることが出来ました。初対面とは思えないほど、こちらの想いや考えを汲み取りながら話を進めてくださる、非常に優しい先生というのがこの時感じた印象でした(それは今も変わっていません)。

想いを伝えることに集中して時間を意識しないで話してしまったため、どれくらいの時間が経過したのか自分ではわかりませんでした。こちらの想いを一通り聞いていただいた後、川井先生から思いもよらないお返事がありました。それは、「一度、学部生のゼミに来てみないか」という提案でした。断られることを覚悟していた私にとっては、全く想像していなかったことでしたが、是非とも参加させてい

ただきたい旨を伝えました。新年度4月から学部生ゼミが始まるので、3、4回生のゼミにゲストスピーカーとして招いていただき、それから都合のつく日程で参加させていただけることが決まりました。

帰りのバスは、数週間の緊張状態から解放されたこともあり放心状態でした。ただ、こちらのお願いを真摯に受け止めてくださった川井先生の人柄に感銘を受けていました。「なんかスゴく温かい先生やったなあ…。」バスの窓から卒業式帰りの親子づれを何組も見かけました。気付けば季節は新年度の春を迎えようとしていました。